

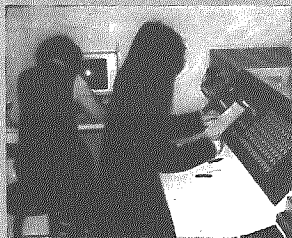
消防防災無線

「こちらは、広報いわむろです」

局から1年...

「こちらは広報いわむろ、広報いわむろです……」と主要行事の案内や各種のお知らせが屋外スピーカーから全村に流れる。

昭和60年度の村の重点事業の一つとして全村をカバーする情報網として整備した消防防災無線も開局から、きょうでちょうど1年が経ちました。昨年1年間で放送された件数は213件。月平均18回の放送でした。1年を経過し、その効果はどんなものだったのでしょうか。また今後の消防防災無線のあり方は……。



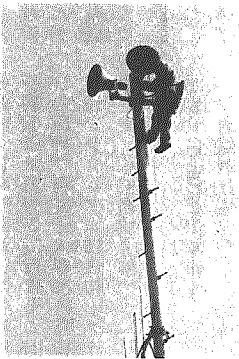
ところで開局当初、「よく聞こえない。何かしゃべって（話して）いたよ」うだが、内容は……とか「いま、（無線を）放送しましたか」といった内容の電話照会が村に殺到しました。また、「朝早くから放送されてはたまらん。安眠妨害だ」といった苦情も寄せられました。

ちょうど開局時期が冬場だったというので、窓を締め切っている家庭が多いことや昼夜の時間差が大きいことなどのためでは、と村では判断していたのですが、災害はいつ、どんなとき襲ってくるかわかりません。平常時の広報活動ですら聞きとりにくいのは、緊急時にその効果が期待できない、とのことから、昨年四月、屋外スピーカー施設の再調整を実施しました。

これで万全だとは

みなさんから寄せられた情報（苦情など）をもとに、各方面から分析した結果、本村は間瀬地区など一部の地区を除き、ほとんどが平坦部に位置し、各地のスピーカーから流れる音声が届きに反響する場面が多いため（部落間が近い）、放送は奇数、偶数のスピーカーごとに二回に分けて放送しているのですが、各地の屋外スピーカーの方向を全体に下向きに移動させ、部落内だけに届くよう配慮しました。この結果、「聞きとりにくい」という苦情は減ったものの、「これで万全だ」と、言

▲昨年の四月三十日、屋外スピーカー施設の再調整が行われました。



村の無線放送のあり方の再検討と個別受信機などの施設整備と併せ、みなさんの受信姿勢の向上が一致して、はじめて有効な情報網として生きるのではないのでしょうか。

これからが正念場!

昨年十一月二十一日に大噴火した伊豆大島の三原山。まだ記憶に新しい衝撃的なニュースです。大島町の全町民は約一万一千人。本村とほぼ同規模です。ここで全町民を島外に全員無事避難させる際に効果を発揮したのが防災無線です。火山島という常に危険性のある状況はありますが、風水害など本村もいつこれに似た事態が発生するかわかりません。このように万一の災害に備え、もっと防災無線のあり方、受け手などみなで考えていかなければならないのではないのでしょうか。

きょうで開局からちょうど満一年。これからが消防防災無線の有効利用の正念場になっていくのでは……。

「こちらは 開

えないことは事実です。それは、部落の地形（家並みなど）により、良く聞こえる所とそうでない所、中には全く放送している内容がわからない、といった地区や家庭があります。石瀬や岩室、間瀬の一部がそれに当たります。片側が山になっている地区が多いよう

個別受信機の 検討も

「よその町村では戸別受信機というものがあり、ラジオのように家の中や外でも聞くことができる。そうじゃないですか。それを各世帯に付けては」とある村民からアドバイスを受けました。これは貴重なご意見としてお伺いしましたが、とても二千六百余りの全世帯に受信機を設置することは財政的にみても困難なことです。それは現在、この種の受信機は一台が約五万円。仮に全世帯に村費で設置するとした場合、約一億三千万円もかかる計算になります。これだけコスト高な理由は、防災無線が特別な電波を使用するため、製品は全て特注品となるためです。

災害時には 最大の効果を

本村の消防防災無線は、役場内（防災無線室）に設けられた本局と村内四十か所に設置された屋外スピーカー施設を無線で結んだもので、自治省の大震災対策施設整備事業の補助を受けた六十年年度事業の「目玉」。災害などの緊急時にはみなさんの安全を守るための情報網として、また平常時は検診や催しなど村からのお知らせのほか、岩室村農協、和納農協にある遠隔制御装置を使って各種の営農指導などの情報を村内に行き渡らせることを目的として設置したものです。放送・連絡は、ケースによって全村、消防団幹部、区長ごとの切り替えも可能なシステムです。

苦情続出から再調整

開局はご存知のとおり六十一年一月一日、村長の「新年のあいさつ」でスタートしました。開局の一月一日から十二月末までの昨年一年間に放送した件数は二百十三件。月平均約十八件でした。また、お知らせのほか、毎日、朝六時と昼十一時半、そして夕方六時の一日三回、チャイムによる時報をお届けしています。これは単にお知らせや時報を放送することだけが目的ではありません。消防防災無線の性格上、万一の災害時にその能力を十二分に発揮するための「試験」を行っているわけです。

家庭用品やわたしたちの体のように毎日使っていてこそ、はじめてその力が出せるわけですね。設置しただけで稼働させないのでは、一分一秒を争う災害時に十分な対応が期待できなくなる恐れがあるためです。

施設整備と受信 姿勢が一致して

それではいったいどんな対応をすれば、無線の効果を上げることができるのでしょうか。

一つには、無線の施設整備を進め難聴地域の解消を図ることです。先の個別受信機を年次的に設置していく、というご提案もその一例といえるでしょう。また、みなさんから関心をもって聞いてもらえる放送内容の検討——例えば小学生などの協力を得てさわやかな放送番組を作るなど放送手段の開発などもあげられますね。

そしてもう一点は、みなさんの放送に対する関心度のアップです。どんなに重要な放送をしてもそれに関心をもたないのでは何んでもありません。ちよつとオーバーな言い方をすれば、家の中でテレビを見ながら外の放送を聞くというのはいくらもありません。放送が始まったらテレビのボリュームを下げるとか話を控えるなど聞きやすい状態にすることも肝心な

ものでは……。もちろん、家庭の雑音の中でもわかるような放送をすることがベストだと思いますが、全体が納得いくという放送はなかなか困難なことですね。要は、